母子相互作用における母親要因の分析
―母親の子どもに対する働きかけと母性敏感性について―

分担研究者　山　下　文　雄（久留米大小児科）
研究協力者　板　井　修　一（福岡県精神衛生センター）
秋　山　俊　夫（福岡教育大学）
橋　爪　広　好（北九州市・橋爪小児科）

子どもが，乳幼児期にある特定の人物（特に母親）との間に，愛着（attachment）を形成できるかどうかは，その後の精神発達に重要な意味をもっている。

日頃，適応に問題をもつ多くの子どもたちと接していると，母親に対しての愛着の形成に失敗していると考えられるものによく出会う。そしてその母親の子どもに対する態度にある共通した印象を受ける。それは子どもへの働きかけの乏しさであり，子どもの出すさまざまの信号，すなわち表情やしぐさ，泣き声といった非言語的（non－verbal）な信号に対する母親の感受性の乏しさである。

M. Ainsworth[1]は，綿密な観察から子どもに与える母親の養育の量を評価し，これと子どもの愛着行動との関連を調べ，養育の量の少ない母親の子は愛着行動を示さないことを明らかにしている。またM. Ainsworth と B. Wittig[2]は，健康的な愛着が形成されるための要因をいくつかあげているが，赤ん坊への身体接触の量の多さも重要だが，さらに重要なのは，赤ん坊の出す信号に対する母親の敏感性（mother's sensitivity to the baby's signals）だと言っている。

われわれはそこでまず，調査Ⅰとして母親の子どもへの接触の仕方と愛着の形成との関係について確め，次に子どもに対する働きかけの乏しい母親は，母親の他の要因とどう関係しているのかについて，母親の生育歴（母親の受けた養育）との関連から調べてみた。

さらにわれわれは，乳児の出すさまざまの泣き声が何をあらわしているかを，どれだけ正確に聞き分けられるかをみることで，母親の敏感性の一面をある程度とらえることができるだろうと考えた。そういう方法でとらえられた敏感性がどういう他の要因と関連しているのかということと，敏感性の高低と子どもの適応との関係について，調査Ⅱで調べた。

調査Ⅰ．母親の子どもへの接触の仕方について

方法　＜対象＞　アンケート形式でK市内の8つの幼稚園・保育園で調査をおこなった。1068名の資料を得たが，今回はそのうち子どもが3才以上になっているものをランダムに選び出し，132名（男62名，女70名）について整理した。

＜調査方法＞　以下の事項に関する質問項目から成るアンケートを作成した。①人見知り，後追いの出現状況，②母親の子どもへの働きかけ，③母親が小さい頃受けた養育，④母性感情。アンケートは，家庭にもちかえり母親に記入するよう依頼し，後日回収した。

＜結果＞　1）母親の子どもへの接触の仕方と人見知り，後追いのあらわれ方

①一人でおとなしく寝かせておく，②だっこやおんぶをしてやる，③一人で遊ばせておく，④身体のふれあう遊びをしてやるという4つの母親の子どもへの接し方と，人見知り，後追いのあらわれ方との関連をみた。

表1にみられるように，だっこやおんぶをしてやることが多かった場合，人見知りをしなかったものは，それが少なかった場合とくらべて有意に少なかった。接触の少なかったものでは，人見知りや後追いをしなかったというものが多いと思われる結果を，他の3つの項目でも得たが，有意な傾向とは認められなかった。

2）母親の子どもへの接触の仕方と母親の受けた養育との関係

母親が小さい頃に受けた養育を，①母親といっしょのふとんで寝た記憶があるか，②母親の膝に

のったり，おんぶをしてもらった記憶があるか，③髪や耳の手入れをしてもらった記憶があるかについて聞くことで調べた。この3項目に対する回答のしかたから，0点から6点までに母親の受けた養育を評価した。点の高いほどよくかまってもらったということである。これと，先の4つの母親の子どもへの接触のしかたを総合した得点との関連をみたが，有意な関連は見出しえなかった。

しかし，表2にみられるとおり，母親が小さい頃かまってもらえないと，結婚して子どもを生んだ後も子どもが嫌いというものが多かった。またそうした母親は，娘時代からすでに，子どもが嫌いであったことも明らかになっている。

調査Ⅱ．母性敏感性について

方法　＜対象＞　女子大生200名，小児科看護婦21名，小学生の母親79名の計300名。

分析のためこの300名の対象のうち，泣き声弁別得点（後述）が9点以上のものを敏感性群（$n=40$），2点以下のものを非敏感性群（$n=33$）とした。また敏感性と子どもの適応との関係をみるために，79名の母親を泣き声弁別得点が四分領域でQ_3以上のものを敏感性（$n=17$），Q_1以下のものを非敏感性群（$n=17$）と分けた。

＜調査内容＞　1）泣き声弁別テスト ― テープレコーダーにふきこまれた5種類の泣き声刺激（①甘えたい，②おむつが濡れている，③眠い，④おなかがすいている，⑤病気の時の泣き声）を1回ずつ呈示し，その泣き声がどの種類の泣き声かを回答用紙の選択肢から選ばせた。各泣き声刺激を2回ずつ計10回呈示する。次にその泣き声がどの種類の泣き声か解説し，その後で同様に計10回，総計20回の泣き声刺激を呈示する。正答数をもって泣き声弁別得点とし，母性敏感性の指標とした。

2）パースナリティ・インベントリー

3）母性同一性テスト ― 平井[3]の作成した質問紙を参考に，6項目の質問で構成した。

4）幼児・児童性格診断テスト

5）養育態度テスト ― 受容－拒否，支配－服従という相反する養育態度に関する質問項目と，養育態度の矛盾傾向をみる質問で構成されている。

＜結果＞　1）敏感性と養育経験

今現在，子どもの泣き声を身近かに耳にしている看護婦の泣き声弁別得点は5.9（2.37）で，今はその経験に乏しい母親の4.6（2.44）よりも有意に高かった。

2）敏感性と性格特性

表3にみられるとおり，敏感性群の方が非敏感性群よりも循環気質傾向が強く，神経質な面も強かった。

3）敏感性と母性同一性

敏感性の高低と母性同一性の高低の間には何の関連も認められなかった。

4）母親の敏感性と子どもの適応状態

敏感性群と非敏感性群の幼児・児童性格診断テストの結果を比較したが，そのいずれの下位項目においても有意差は見出されなかった。

5）母親の敏感性と母性同一性の関連からみた子どもの適応

敏感性の高低と母性同一性の高低の組合わせで，母親を4つのタイプに分けた。

敏感性・高＋母性同一性・高 ― Aタイプ
敏感性・高＋母性同一性・低 ― Bタイプ
敏感性・低＋母性同一性・高 ― Cタイプ
敏感性・低＋母性同一性・低 ― Dタイプ

図1にみられるとおり，Aタイプの子どもにくらべると，他の3タイプの子どもの適応状態は悪い。特に敏感性の低いC・Dタイプでは，問題とみなしてよい30パーセンタイル値以下の下位項目が多い。

6）各タイプの母親の養育態度

受容－拒否，服従－支配ということでは，4タイプの間にちがいは見出されなかった。しかし養育の一貫性を問題とする矛盾傾向が，Aタイプ以外のもので強いことがわかった。

＜考察＞　おりの中で母親から離され，母親の養育を受けずに育てられたサルは，たとえ成長して妊娠し子どもを生んでも，自分の子どもに関心を示さなかったり虐待をしたりすることをH. Harlow[4]は見出している。彼はこの母ザルをunmothered－motherと呼んでいる。われわれの調査からも，ほとんど母親からかまってもらえずに育った母親は，子どもが好きになれずにいることがわかる。愛されたことがなければ愛することができないのである。母親と子どもの相互作

用は，おたがいの行動がおたがいの行動に影響しあうプロセスであるが，母親が子どもにどう働きかけていくかどう応答していくかは，すでに母親の生育歴の中で決まっている部分もあると考えてもよいかもしれない。また母性敏感性という要因においても，確かに学習経験によって高められる部分もあるが，気質といったその母親のもって生まれた素質とも関係が深いことが明らかになっている。こうしたことから母子相互作用は，母親の生育歴や個性などの要因を考慮に入れながらみていくことが重要であろう。

次に母性敏感性と子どもの適応との関係であるが，敏感性の低い場合，母性同一性の高低にかかわらず，子どもの適応は悪かった。母性同一性つまり子どもへの陽性の感情を強くもっていても，子どもの状態を共感的に理解する能力が低ければ，子どもとのコミュニケーションは損われ問題が生じるのであろう。敏感性は子どもからのサインをインプットしていく過程と関係しており，このインプットがうまくいかなければ子どもへの反応をかえしていくアウトプットの過程もうまくいかなくなると考えられる。多くの研究は，子どもへの反応性・応答性といったアウトプットの子どもへの影響の大きさを示摘するが，臨床的には母親のもつ敏感性という要因も大きな意味があると考えられる。

文　　献

1) Ainsworth, M. D.: The development of infant-mother interaction among the Ganda. In B. M. Foss (Ed.) Determinants of infant behaviour II. pp67－112, 1963.

2) Ainsworth, M. D. & Wittig, B. A.: Attachment and exploratory behaviour of one－year－olds in strange situation. In B. M. Foss (Ed.) Determinants of infant behaviour IV. pp 111－136, 1969.

3) 平井信義：母性愛の研究，同文書院，1976.

4) Harlow, H. F.: The maternal affectional system. In B. M. Foss (Ed.) Determinants of infant behaviour II. pp 3－33, 1963.

表 1.　母親の子どもへの接し方と人見知りのあらわれ方

		だっこ・おんぶ			計
		多かった	ふつうだった	少なかった	
人見知り	激しかった	11(22.9)	6(8.7)	2(14.3)	19(14.5)
	少しした	26(54.2)	36(52.2)	4(28.6)	66(50.4)
	しなかった	11(22.9)	27(39.1)	8(57.1)	46(35.1)
計		48(100)	69(100)	14(100)	131(100)

$x^2 = 5.995$　$p < .05$

表 2.　母親の受けた養育と子どもに対する感情

	母親の受けた養育(得点)				計
	6	5.4	3.2	1.0	
子ども好き	9(90.0)	20(76.9)	45(81.8)	16(53.3)	90(74.4)
どちらでもない	1(10.0)	5(19.2)	7(12.7)	8(26.7)	21(17.4)
子どもは嫌い	0(0)	1(3.9)	3(5.5)	6(20.0)	10(8.3)
計	10(100)	26(100)	55(100)	30(100)	121(100)

$x^2 = 8.211$　$p < .02$

表 3.　敏感性と性格特徴

	Z	E	S	H	N
敏感性群 $\bar{x}$	12.1	8.3	6.8	7.5	9.4
(N=40)(S.D.)	(3.08)	(2.88)	(3.33)	(3.15)	(3.31)
非敏感性群 $\bar{x}$	10.3	7.5	5.8	6.7	7.3
(N=33)(S.D.)	(3.12)	(3.10)	(2.92)	(3.34)	(3.96)
T−test	2.436*	n.s.	n.s.	n.s.	2.433*

*……$p < .02$

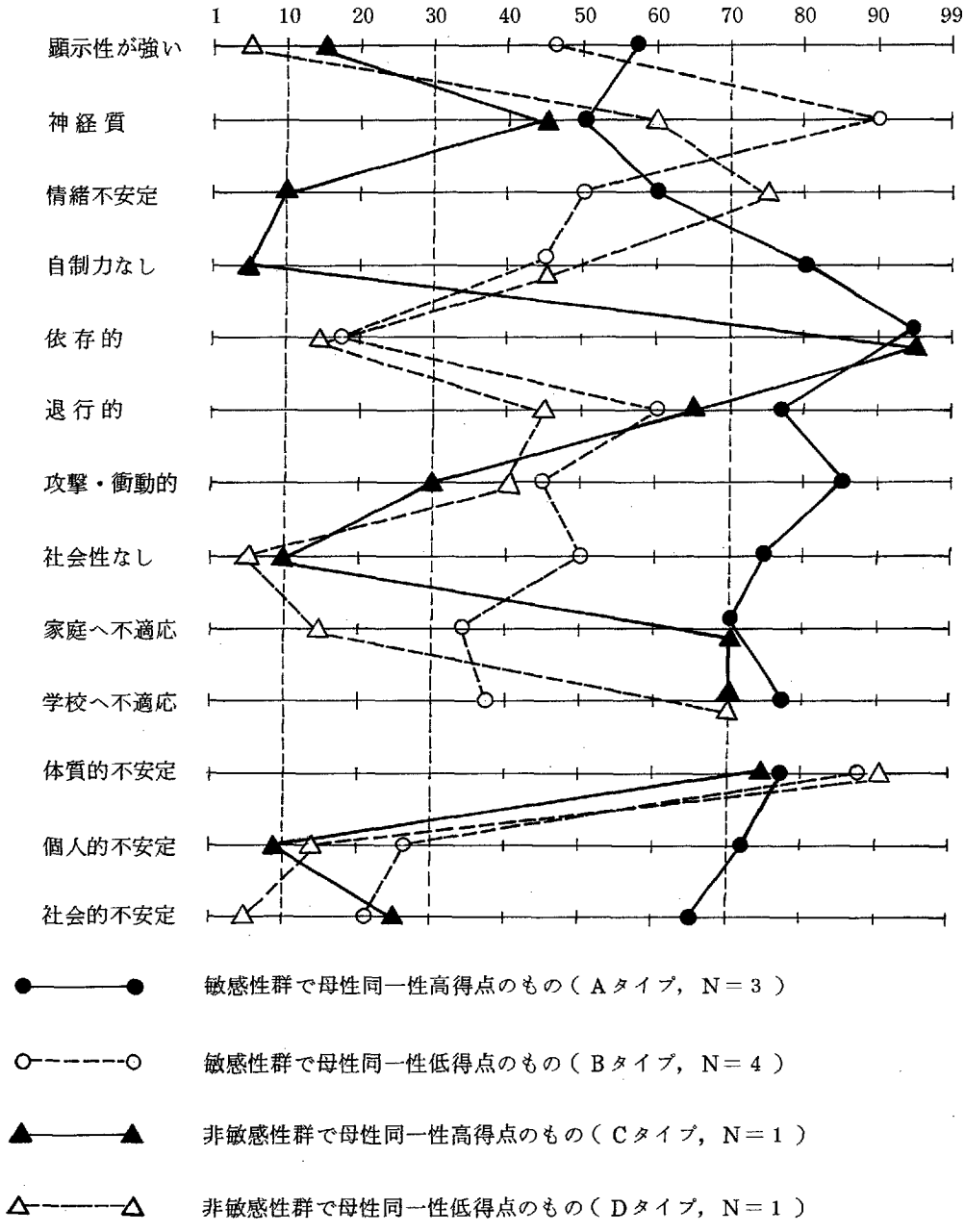

図1. 母親の敏感性と母性同一性の関係からみた子どもの適応

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

子どもが,乳幼児期にある特定の人物.(特に母親)との間に,愛着(attachment)を形成できるかどうかは,その後の精神発達に重要な意味をもっている。
日頃,適応に問題をもつ多くの子どもたちと接していると,母親に対しての愛着の形成に失敗していると考えられるものによく出会う。そしてその母親の子どもに対する態度にある共通した印象を受ける。それは子どもへの働きかけの乏しさであり,子どもの出すさまざまの信号,すなわち表情やしぐさ,泣き声といった非言語的(nonverba1)な信号に対する母親の感受性の乏しさである。